

2023年1月1日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 130 : 7~8

ルカによる福音書 2 : 21

「イエスという名」

(ハイデルベルク信仰問答 問 29~30) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

<イエスさまの命名日>

明けましておめでとうございます。今年はちょうど1月1日が日曜日となり、元旦に主の日の礼拝をささげることとなりました。新しい年の初めの日を、皆さんと共に御言葉を聞くことから始めることが出来る恵みを、心から感謝したいと思います。

さて、この1月1日。わたしたちは日本の大きな行事であるお正月に心を奪われがちです。でも実は教会において、1月1日は、今日のルカによる福音書に書かれていたことを覚える記念の日なのです。聖書には何とあったでしょうか。もう一度読んでみます。

2章21節「八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。」

「八日たって」とありますが、何から八日たったのでしょうか。それは八日前、ちょうど一週間前の日曜日を思い起こすと分かります。先週の日曜日はちょうど12月25日で、クリスマスの礼拝をささげました。クリスマスは、イエスさまがこの世にお生まれになったことを覚えて、感謝してお祝いする日です。ですから、今日の聖書の「八日たって」というのは、イエスさまがお生まれになってから八日たって、ということです。

今のカレンダーで、イエスさまの誕生を記念する日を12月25日とするなら、八日後は今日の1月1日に当たります。お生まれになってから八日がたち、幼子は割礼を受け、「イエス」と名付けられました。

ですから、1月1日は、イエスさまの「命名日」として記念する日なのです。

カトリック教会や、ルーテル教会、聖公会では、1月1日を「主の命名日」とか、「命名祭」といって、教会の暦として大切にしています。

わたしたちの教会では、実はあまりイエスさまが命名された日ということ、大きく覚えたり、記念したりすることは少なかったように思います。でも、毎年必ず1月1日はイエスさまの命名日なのです。ですから、これからは新しい年の始まりに、「お正月だ！」というよりはむしろ、イエスさまのお名前を思い巡らす日にできれば、と思います。

また、わたしたちの礼拝では、昨年「ハイデルベルク信仰問答」に基づいての御言葉の説教がなされています。

今日からは、第二部の「子なる神について」というところに入ります。ここからはしばらくは、「使徒信条」の二つ目の段落、「我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず」というところの信仰告白の内容を、丁寧に見ていくことになります。

それでなんと、今日はちょうど「イエス」というお名前についての信仰問答の部分が当たっていたのです。神さまの不思議なご配慮を感じます。

今日は、この「イエスさまの命名日」に、わたしたちの救い主が、「イエス」という名前のお方であることの恵みを、深く見つめたいと思います。

#### <救済者>

では、今日の信仰問答の問いを見てみましょう。問 29 にはこうありました。

「なぜ神の御子は『イエス』すなわち『救済者』と呼ばれるのですか。」

まず、「イエス」というのは、「主は救い」という意味の言葉です。それで、問答に「『イエス』すなわち『救済者』と呼ばれる」とあるのです。昔からユダヤ人の間では、「イエス」というのは、長男が生まれた時によく付けられた、実にありふれた名前でした。

「イエス」はギリシア語読みで、ヘブライ語では「ヨシュア」といいます。

子どもを与えられた親たちは、色々な願いや期待を込めて名前を付けます。

おそらく、この「主は救い」という名も、主なる神さまが、一家に祝福を受け継ぐ子どもを与えて下さった。その恵みを感謝すると共に、これからも主が、救いの恵みと祝福を豊かに与えて下さるように。そう祈り願って「主は救い」と付けられたのでしょう。

しかし、聖霊によって身ごもったマリアから生まれた幼子は、マリアと夫ヨセフがその名前を決めたのではありませんでした。

ルカによる福音書 1・30～31 にはこうあります。「すると、天使は言った。『マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。...』」

また、マタイによる福音書 1・20～21 には、このような箇所があります。「このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。...』」

このように、幼子の「イエス」という名前は、天使がつけるように命じたのです。

それは、この幼子の「主は救い」という名前は、人間の祈りや願いではなく、神さまのご意志が示された名前である、ということです。

天使が「この子は自分の民を罪から救うからである」と告げたように、まさに、この幼子は、すべての人間の罪を担い、贖いの御業を成し遂げ、すべての人を救うために、神さまがこの世にお遣わしになったお方です。この幼子は、「主は救い」という名前そのものとなられるお方なのです。

天使がマリアとヨセフに名付けるように命じた「イエス」という名前は、この神さまの救いのご計画、御心を明らかにすると共に、まさにこのお方の本質を現わす名前なのです。

#### <唯一の救い>

このように、神さまの御心によって、天使に示され、「イエス」と名付けられたのは、このマリアからお生まれになったイエスさま以外にはおりません。

イエスさまは、神さまの独り子であり、聖霊によってマリアに宿られ、まことの人としてお生まれになりました。それは、神さまと、わたしたち罪人の間に立って、わたしたちの仲保者となって執り成しをし、罪を贖って下さるためです。

それを実現することが出来る、まことの神であり、まことの人間である仲保者は、この方ただお一人だけなのです。(問 16～18「ただ一人の仲保者」)

ですから、信仰問答の間 29 の答えは、このように語っています。

「それは、この方がわたしたちを わたしたちの罪から救ってくださるからであり、唯一の救いをほかの誰かに求めたり、ましてや見出すことなどできないからです。」

この「イエス」、「主は救い」「救済者」と呼ばれる方は、わたしたちの「唯一の救い」です。ですから、わたしたちが自分の救いを、ほかの誰かや何かに求めたり、見出したりすることは、決してできないのです。

#### <救いを他に求めること>

そこで、そのことをはっきりとさせるために、次の問 30 の問答があります。

「それでは、自分の幸福や救いを 聖人や自分自身やほかのどこかに求めている人々は、唯一の救済者イエスを信じていると言えますか。」

答は、「いいえ」とはっきり告げています。

#### [当時の背景、聖人について]

この問答の意味を理解するには、「ハイデルベルク信仰問答」が書かれたのが、宗教改革からまだ間もない時代であるという、当時の背景も少し知っておかなければなりません。

ここには「聖人」が出てきます。聖人は、信仰のために立派に働いた人や、殉教した人など、その人の信仰の歩みに応じて、教会が認定していました。

そしてローマ・カトリック教会では、神さまの祝福や救いを、イエス・キリストにだけでなく、聖母マリアや聖人たちにも、祈り求めています。

また、聖人といえば、職業ごとに「守護聖人」などが定められ、人々に崇拝されてきました。人々にとっては、神の御子であるイエス・キリストよりも、聖人の方が、信仰の素晴らしい先輩として、もっと身近で日常的な存在だったのかも知れません。それで、イエス・キリストに祈るよりも、まずは聖人たちに祈り求めることがなされていたのです。

また、当時は教会において、人間が神さまに救われるためには、信仰と共に、人間の善い行い、功績・功德も必要とされていました。

そのような中で、聖人と呼ばれる人々は、自分を救ってもなお余りある功德を積んでいると考えられました。ですから、聖人の余った功德を、教会に蓄えておいて、他の善い行いが足りない人に、分け与えたりすることが出来る、と考えられていたのです。

その権限は教会が持っており、やがてその聖人の功德を「免罪符（贖宥状）」として人々に販売する、ということが起こります。

当時は、このことへの抗議が一つのきっかけとなり、宗教改革が起こってプロテスタント教会が生まれました。この「ハイデルベルク信仰問答」は、宗教改革後の初期のプロテスタント教会で書かれましたから、特にこの聖人や、善い行いのことが語られたのでしょう。

[今の時代も、救いを自分自身やほかのどこかに]

しかし、これは当時の問題で、今はもう不要な問答になってしまったわけではありません。問30には、「自分の幸福や救いを」「自分自身やほかのどこかに求めている」人々のことも指摘しています。

これは、ハイデルベルク信仰問答の時代に留まらず。また、聖人崇拝をする人々に向けて語られただけでなく。今の時代、ここにいるわたしたちにも、自分の幸福や救いを、自分自身や、ほかのどこかに求めているのか。それを厳しく問うているのです。

自分の幸福や救いを、イエスさま以外の、自分自身やほかのどこかに求める。それは、わたしたちが、自分の信仰に不安を感じて、あるいは、救いに確信のなさを覚えて、他のもので補強したり、埋め合わせたりしようとする事です。

でもそれは、イエスさまに与えられた救いの恵みで、満足していないということ。イエスさまの救いでは、不足があると考えているのと同じことなのです。

例えば、信仰の歩みをする上で、熱心で真面目でなければならない、立派でなければならない、努力して善い人間になり、正しい生活をしなければならない、と思うこと。

それは、決して悪いことではないでしょう。でもそこに、そうしなければクリスチャンとしてダメだ、というような強迫の思いがあったり、心の平安がないのなら。それは、「自分の幸福や救いを」イエスさま以外に、求めていることの表れなのかも知れません。

本来、キリスト者の善い行いや、清い生活や、奉仕などは、イエスさまの救いに与った感謝と喜びに押し出されて、神さまの恵みのお応えして、自ら自由にやるものです。

でも、もし信仰生活において、そうしなければならない、何かを行わなければならない、と思っているなら。それは、信仰の不安や、救いの確信のなさを、自分の善い行いや、そこで得られる達成感によって。あるいは、周りの人々に認められたり、評価されることによって、補おうとしているのかも知れません。

それに、わたしたちは幸福を、祝福を、本当にイエスさまだけに求めているのでしょうか。

救いに与り、神さまと共に歩むこと。神さまを礼拝して生きること。イエスさまのものとされたこと。わたしたちはこれ以上ない幸いを、十分に受け取っているはずなのです。

それなのに、不足を感じたり、不平をもらしたり、自分を喜ばせるものを、あるいは安心できるものを、もっともっと、と求めていることはないでしょうか。

#### <イエスさまが唯一の救い>

イエスさまが「唯一の救い」である、ということは、救いを、ただこの方だけから、すべて受け取る、ということです。この方が与えて下さる救いを、まことの幸福を、何一つ不足のないものとして、心から満足して受け入れるということです。

そして、それを受け取ったなら、わたしたちはもう一切、ほかのものに頼る必要はありません。なぜなら、唯一の救いを、完全な救いを、いただいているからです。

実際、わたしたちは、自分自身やほかのもので、自分の救いを補ったり、自分の幸福を満たしたりすることは、まったくできないのです。

一時的には、救われたような気持ち、幸福が満たされたような気持ちになることは、あるかも知れません。でも、永遠に失われることのない、まことの救い、まことの幸福は、唯一の救い主であるイエスさまからしか、いただくことは出来ないのです。

…わたしたちが、神さまの御心を忘れ、御許から遠く離れ、悲惨の中でどうしようもできなくなり、自分自身ではもはや贖うことが出来なくなってしまった罪。この罪の中から、わたしたちを取り戻し、神さまの御許に帰らせるためにこそ。神の御子は世に下り、まことの人となり、「イエス」、「主は救い」という名を、お引き受けになったのです。

わたしたちは、イエスさまの十字架の死によって、罪を贖われました。神の御子が、ご自分の命を捨てて、わたしたちの罪を完全に贖って下さったのです。わたしの救いのために、神の身分を捨てて世に来られ、低くなり、貧しくなり、小さくなり、痛みも苦しみも引き受けて、十字架に架かって死なれたのです。そうして、神の御子が救いを成し遂げられた。

それなのに、聖人の功德。それがなければ、イエスさまの十字架の死だけで、わたしの罪は贖いきれないというのでしょうか。わたしたちの善い行い。それを、イエスさまが成し遂げて下さった救いに、付け足す必要があるのでしょうか。そんな考えは、イエスさまに対してとても失礼だし、また神さまに対して、とても傲慢なことなのではないでしょうか。

たとえわたしたちが、イエスさまを信じ、救い主です、と口では告白していても。イエスさまを誇っていたとしても。もし、救いや、幸福について、少しでも自分自身や、他のものにも頼ろうとするならば。そのような思いが、心の中に少しでもあるならば。

わたしたちは、あのイエスさまの十字架の苦しみと死を、神さまの救いの全能の力を、軽んじることになる。あるいは、イエスさまの十字架を、まったく無に帰そうとする行為にさえ、なるのです。

また、信仰に自信がないと言ったり、自分はもうダメだと、救いから離れたような気持ちや、諦める思いになるようなことも、イエスさまの救いの恵みを過少評価しています。

神の御子イエスさまが、ご自分の命を捨てて救って下さったのです。それがどうしてダメになることなどあるのでしょうか。神さまが、わたしたちを救われたのです。どうしてそれが、わたしたちの弱さや、不安さによって、失われることがあるのでしょうか。

わたしたちは、ひたすらに、どうしようもない罪人でした。ただ神さまを悲しませるほかは、何もしていないし、何もできなかったのです。

だからこそ、神の御子イエスさまが、わたしたちの許に来て下さったのです。この方にしか、わたしたちの罪を贖うことは出来ないから、神の御子は、まことの人となり、十字架に架かられたのです。ただこの方お一人が、唯一の救い、唯一の救済者なのです。

#### <完全な救い主>

だから、問 30 の答えの後半にはこうありました。

「なぜなら、イエスが完全な救い主ではないとするか、そうでなければ、この救い主を真実な信仰をもって受け入れ、自分の救いに必要なことすべてをこの方のうちに持たねばならないか、どちらかだからです。」

もしわずかでも、わたしたちがイエスさまのほかに、救いや幸福を求めているなら、わたしたちは「イエスさまを完全な救い主ではない」としていることになります。足りない部分を補わなければならない、不完全な救い主としているのです。

しかし、イエスさまが完全な救い主である、この方にこそ「唯一の救い」があると、信じあるならば。わたしたちは、イエスさまを、この救い主を、「真実な信仰をもって受け入れ、自分の救いに必要なことすべてを、この方のうちに持たねば」ならないのです。

いやむしろ、持たねばならないというより、この方に、わたしの救いに必要なことがすべてであると信じ切ってよいのです。もっと信頼してよい。もっと安心してよいのです。

イエスさまを唯一の救い主として信じるということは、ここにさえより頼んでいれば、絶対に大丈夫、ということです。

それは、わたしたちに心からの平安と、また本当の自由さを与えます。

確かに、わたしたちは、救いを信じてもお、神さまに罪を犯します。何か善いことをしようとしても、人を傷つけたり、自己満足に終わったりします。隣人を心から愛すること、ましてや敵を赦すことは、困難極まりないことです。何一つ満足に、神さまの御言葉に従えない、足りないものばかりの、わたしたちです。

でもそれは、イエスさまが、すべて満たして下さるのです。ご自分の十字架の死と復活の救いの御業で、わたしたちが出来ないことを成し遂げ、わたしたちが持っていないものを与えて下さり、ご自分のすべてで、わたしたちを十分に満たして下さるのです。

そして、御言葉に従えないわたしたちに、御言葉に従うための力をも、与えて下さいます。

このイエスさまの救いに、何を付け足す必要もありません。ただ、このイエスさまに頼る。ただこのお方に、唯一の救いがある。この方に、自分の救いに必要なすべてがある。

だから本当に、わたしたちはこのお方さえ持っていれば、ほかに何もなくても大丈夫なのです。わたしたちは、すべてを豊かに、完全に満たして下さる、この唯一のお方だけを、わたしの救い主として、心を開いて、受け入れたいのです。

そしてイエスさま共にあるわたしたちには、イエスさまのものとされたわたしたちには、ますます恵みが増し加えられ、満ち溢れ、香りを放ち、やがて外へも流れ出していくのです。

わたしたちは、またこれから始まる新しい日々の中で、「イエス」さまのお名前を呼ぶたびに、この「唯一の救済者、救い主」が、「わたしの救い主」である。このイエスさまに、「唯一の救い」、わたしの救いに必要なすべてがある。その幸いを思い起こしつつ、歩んでいきたいのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちを罪から救うために、御子をお遣わし下さったこと。この方の「イエス」というお名前を通して、この方こそ、わたしたちの唯一の救い主であることを明らかにして下さい、感謝いたします。

あなたの大いなる恵みを、イエスさまの完全な罪の贖いを、わたしたちがしっかりと見つめることが出来ますように。決して、神さまの恵みや救いを軽んじたり、疑ったりすることがありませんように。そして、イエスさまの救いの御名にあって、わたしたちが心からの平安と、また愛を行うまことの自由に、喜びをもって生きることが出来るようにして下さい。

わたしたちの救い主、救済者、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン